群馬県伊勢崎市・本関町古墳群と周辺集落の動向

－ 集落変遷と湧水点との因果関係 －

（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　坂　口　　一

1．はじめに

伊勢崎市・本関町古墳群は、東西約300m、南北約1,200mの範囲を占地し、古墳時代後・終末期にあたる６・７世紀の古墳群である（図2）。この古墳群には本関町古墳群の報告書で掲載した古墳の他、関山遺跡、上植木光仙房遺跡、光仙房遺跡、三和工業団地Ⅳ遺跡などの諸遺跡が含まれ、これらの遺跡群では40基の古墳が発掘調査されている。また、昭和10年における県下一斉古墳分布調査の『上毛古墳綜覧』殖蓮村には、63基の古墳が記載されている。さらに、本報告書で報告した古墳の大半は『上毛古墳綜覧』に該当するものがなかったが、おそらく周囲には記載漏れの古墳が10基以上は存在するものと予想される。したがってこの古墳群は、その総数がおそらく百数十基に及ぶものと考えられる。

さて、この古墳群の範囲には、その一画に平安時代の住居が立地するものの、古墳時代の住居はまったく存在しない。この古墳群を支えた居住域の主たる場所は、その距離的な位置関係と継続年代から、古墳群の東側に展開した集落の可能性が高い。すなわち、光仙房遺跡、上植木光仙房遺跡、舞台遺跡、

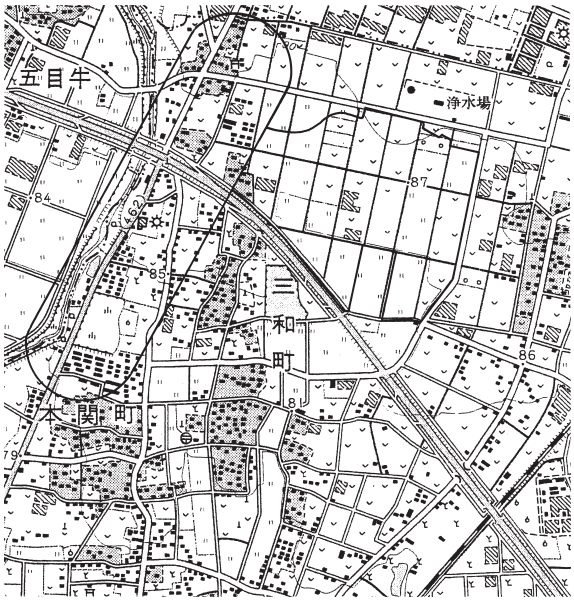

図１　本関町古墳群と周辺集落の位置図（S = 1:25,000）

図２　本関町古墳群古墳分布図（S = 1:7,000）

三和工業団地遺跡、上植木壱町田遺跡、下植木壱町田遺跡である(図3)。これらの諸遺跡では、合計で50万㎡以上の調査区域から、約1,000軒にも達する古墳時代～平安時代の竪穴住居が発掘調査されており、これらを年代別に集計すると、大勢として図3グラフのような変遷を辿る。

まず古墳時代前期の３世紀代に出現した集落が、４世紀代にかけて急激に増大する。次の５世紀代には集落は激減し、それまで主要な分布域であった台地上からほぼ姿を消す。その後６世紀代に再び出現した集落は、その数を減じながらも８世紀代まで継続するが、この６・７世紀代が本関町古墳群に対応する集落の可能性が高い。

さらに９世紀代では再び急激な増加を示し、その規模を減じながらも10世紀代まで継続する。

２．住居分布の変遷

ここでは、住居が立地する遺跡群の地形のうち、この地域に特有な湧水点を概観した上で、主として古墳時代の住居の変遷過程をみてみたい。

この遺跡群は、約５万年前に段丘化したローム台地である、大間々扇状地Ⅰ面(桐原面)の扇央部に立地している。この大間々扇状地Ⅰ面の扇央部には、標高約 90 mの等高線に沿うようにかつていくつかの湧水点が点在し、これらの湧水点の下流には、湧水点を谷頭とする小谷が形成されて、ローム台地をいく筋かの低地が刻んでいる。

遺跡群は、「男井戸」、「角弥清水」、「谷地清水」と呼ばれた湧水点の周囲と、これを起源とする小谷に挟まれた台地上に立地し、これらのうち東側の「男井戸」湧水を起源とする谷(谷Ａ)と、中央部の「角弥清水」を起源とする谷(谷Ｂ)に挟まれた舌状台地(台地Ａ)が、最も広い台地を形成している(図5)。

さて住居の分布状況であるが、出現期の３・４世紀代は、主として谷Ａと谷Ｂに挟まれた台地Ａに約 280 軒の住居が広く展開する(図 4)。また、居住域の南側で、谷Ａの右岸側の縁辺部には、前方後方形２基を含む 32 基の方形周溝墓群が形成され、集落域の一画を墓域が占める形となる。

５世紀代には、主として台地Ａに広く分布していた住居は継続せず、谷Ｂ下流の左岸側に僅かに点在する一画を除いて、この台地のほぼ全域から住居は姿を消す(図 5)。

６世紀代になると、主

図３　本関町古墳群と周辺の集落(Ｓ＝1:10,000)

として台地Ａを中心に約 80 軒の住居が展開する(図6)。但し、３・４世紀代が台地Ａのほぼ全域に分布していたのに対して、この年代には谷Ｂに面した台地の西半部に限定した分布となる。７世紀代もこの分布域を踏襲して、台地Ａの西半部に約 30 軒の住居が分布する(図７)。

奈良時代以降は、谷Ｂの西側付近を中心に約20軒の住居が散在的に分布する８世紀代を経て、９世紀代には台地Ａと谷Ｂの西側に約 290 軒が広く展開する(図3)。この９世紀代の分布範囲をほぼ踏襲して、10 世紀代の住居約 180 軒が分布し、これらを最後にこの遺跡群の範囲から竪穴住居は姿を消す。

３．住居変遷の画期とその背景

変遷の画期　前章で概観した住居の変遷から、これらの遺跡群における古墳時代の集落には次の大きな画期を認めることができる。すなわち①３・４世紀代に広く展開した集落が激減して、その分布域を限定的にする５世紀代と、②５世紀代に激減していた集落が､占地を新たにして再開する６世紀代である。

この二つの画期のうち、②の６世紀代に再開して７世紀代まで継続する集落こそが、本関町古墳群を支えた主たる居住域ではないかと想定している。この６世紀代に再開する集落は、５世紀代とはその分布域を全く異にしていることからみて、基本的には５世紀代からの継続性が認められず、新たに出現した集落であるという点が重要である。つまり、本関町古墳群における初期群集墳は、県下で多くみられる５世紀後半の画期を背景に出現したものとはその様相を異にしているものと言えよう(右島, 1994)。

画期の背景　これらの画期の背景を全て合理的に説明できる論拠は持たないが、その大きな要因のひとつに湧水の枯渇や減少など、湧水点に異変があったものとの想定をしている。これには次に述べるように、集落の出現期である３･４世紀代及び６・７世紀代の住居の分布状況と、三和工業団地Ｉ遺跡における、湧水点の発掘調査が示唆的な資料を提供している。

住居の分布と湧水点　ここで再び、３・４世紀代と６・７世紀代の住居の分布状況をみてみよう。３・４世紀代は、谷Ａの谷頭を中心として台地Ａの広い範囲に住居が分布している(図 4)。これに対して６・７世紀代は、明らかに谷Ａから離れた台地Ａの西半部に限定して分布し、台地Ａのほぼ全域に分布した３・４世紀代とは対照的な分布状況を示している(図 6･7)。この３・４世紀代と６・７世紀代の住居の分布状況の差は、次に示すように３・４世紀代に主要であった谷Ａ湧水点の異変を暗示している。

なお、遺跡群北側の書上浄水場建設時の調査で遺構が全く確認されていないことから、台地Ａの集落はこの分布範囲がその全容とみることができる。

谷Ａ湧水点の発掘資料　三和工業団地Ｉ遺跡では、谷Ａの谷頭付近の発掘調査が行われ、台地上の集落の変遷に示唆的ないくつかの湧水点に関する資料が得られている(坂口, 1999)。そのひとつは、３世紀代における谷頭付近の掘削痕と木材による導水施設(図 8)及び、浅間Ｃ軽石(As-C)に直接被覆された祭祀跡である。これらは、集落の開始時期において谷Ａ湧水点の周囲を掘削し、これによってその湧水量を増やしたことが伺われる。また、この谷頭周辺から出土した土器には、As-C より下位の土器群の他に、As-C降下以降の４世紀代のものも含まれることから、この湧水点の維持は４世紀代まで継続していると判断することができる。

次に６世紀代であるが、この年代にも３世紀代と同様な谷頭付近の掘削痕が検出されている(図 9)。但し、この掘削痕は榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)に相当する層で覆われて出土し、その後に掘削された痕跡がない。一方､この周辺からは陶邑古窯址群編年(田辺, 1981)の MT-15 型式に比定できる須恵器蓋と、これとの平行関係に矛盾がない土師器坏が Hr-FA の直下から出土している。これらの土器群は６世紀初頭に位置付けられ、これらが本関町古墳群における最古段階の土器群と一致しているが、この後に継続する土器群はまったく出土していない。

つまり、これらの掘削痕と伴出する土器群は、本関町古墳群の造営開始時期である６世紀初頭に湧水点付近の掘削を試みたものの、おそらく湧水量の増加を図ることができずに放棄したことを示しており、

図４　周辺遺跡の竪穴住居分布図（３・４世紀）

図５　周辺遺跡の竪穴住居分布図（５世紀）

図６　周辺遺跡の竪穴住居分布図（６世紀）

図７　周辺遺跡の竪穴住居分布図（７世紀）

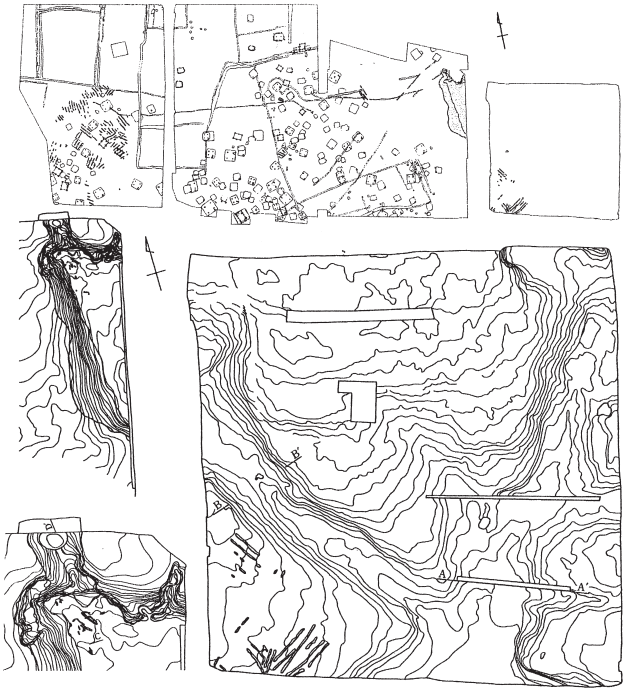

図８　三和工業団地Ⅰ遺跡湧水点（３世紀，S = 1:1,600）

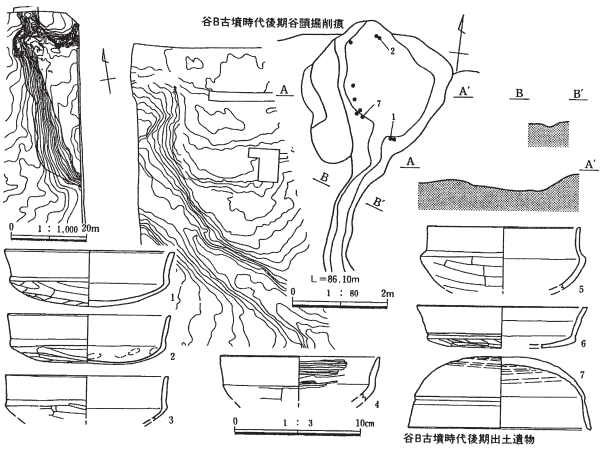

図９　三和工業団地Ⅰ遺跡湧水点・出土遺物（６世紀，S = 1:160）

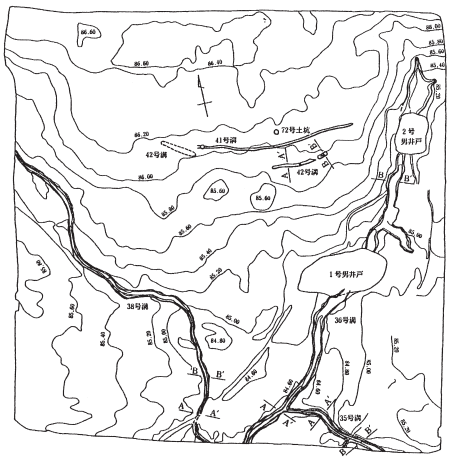

図 10　三和工業団地Ⅰ遺跡湧水点（現代，S = 1:1,600）

谷Ａとその谷頭周辺に６・７世紀代の住居がほとんど分布しないことと一致した現象を示している。

さらに、現代の農業用水に利用していた「男井戸」湧水であるが、発掘調査では覆土の異なる「井戸」が二箇所に検出されている（図 10）。聞き込み調査の結果、これは当初掘られた下池（1号井戸）の湧水量が減少したことに伴って、新たに上池（2 号井戸）を掘削したとの証言を得ている。つまり、これらの資料は湧水点における湧水量が必ずしも一定ではなく、枯渇や減少することがあったことを示している。

以上のことから、住居の分布と湧水点で確認した諸現象とは連動しており、集落変遷の要因のひとつに湧水の枯渇あるいは減少があるとの想定には無理がないものと言えよう。

４．まとめ

本関町古墳群に対応する集落を、その東側に展開する遺跡群に位置付け、その変遷の要因のひとつに湧水点が関係していることを述べてきた。

扇状地の央部では、降水が地下の深部に浸透するという扇状地特有の現象がある。このため、扇状地上で河川から離れたこの地域の水田農耕は、湧水点の存在なくしてその成立はあり得ない。したがって、湧水点付近における住居の分布状況と、これに連動した湧水点の掘削の状況は、集落変遷のひとつのパターンを示していると考えられるのである※1。

なお、本関町古墳群には、６世紀後半に 50 m級の前方後方墳である一ノ関古墳が築造される（出浦，2005）。この古墳は首長墓であることから、その背景となる居住域はおそらくここに示した遺跡群の範囲に収まることは考え難い。したがって、今後さらに周辺における集落の検討が必要になろう。

引用・参考文献

『光仙房遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2003
『上植木光仙房遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988
『舞台遺跡（2）』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2004
『三和工業団地Ⅰ遺跡（2）』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999
『三和工業団地Ⅱ～Ⅳ遺跡』 群馬県企業局他　2004
『下植木壱町田遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1999
『上植木壱町田遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988
右島和夫 1994「上野における群集墳の成立」『東国古墳時代の研究』学生社
坂口一 1999「三和工業団地Ⅰ遺跡における集落と湧水点について」『三和工業団地Ⅰ遺跡（2）』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
出浦崇 2005『関山遺跡Ⅱ』伊勢崎市教育委員会

※1　この遺跡群には、９世紀代に多くの須恵器窯が構築されることから、９世紀代の住居はその生業を古墳時代とは異にしている可能性がある。したがって、これらの変遷の要因は、必ずしも古墳時代とは同一に考えることができないものと考えられる。